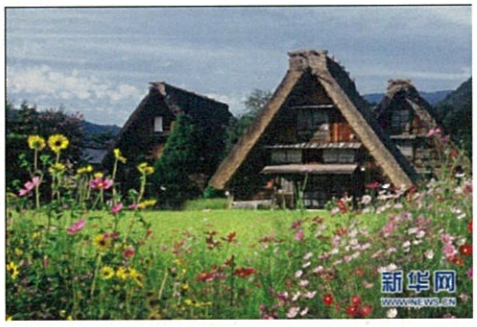
www.news.cn
新华网 NEWS
www.xinhuanet.com
新华通讯社主办　新華網（新華ネット）

本网独家：日本“升龙道”之旅望吸引更多游客（高清）



岐阜白川乡合掌村（世界遗产）图片特供本网

进入５月，日本国土交通省中部运输局局长甲斐正彰骤然忙碌起来。中部运输局与日本中部北陆地区９县联手发起的大型观光项目“ 升龙道”经过前期几个月紧锣密鼓筹办后，５月份迎来集中推广期。

“升龙道”项目由中部运输局牵头，日本中部地区的三重、爱知、 长野、静冈、岐阜、滋贺６县和北陆地区的石川、富山、 福井３县参与。这一大型广域观光项目专门面向中国大陆、香港、 台湾为主的中华圈观光客。在日本，如此众多数量的县“抱团” 吸引中国游客的尝试尚属首次。

甲斐向记者强调，“升龙道”并非一条具体的路线， 而是中部北陆地区９县观光资源的形象化。从地图看， 能登半岛形似龙首，南端的志摩半岛和三重县南构成龙尾， 南北沿线景点串联后，颇有猛龙过江、一飞冲天的气势。

在甲斐看来，除了地利，“升龙道”的构想还有天时、人和。天时， 在于今年恰逢辰龙年，“升龙”蕴含的吉祥、腾飞寓意为中华文化圈所普遍认同。人和， 在于中国观光客在访日外国游客的比重日益提高， 在中部北陆地区尤其如此。

日本观光厅的住宿旅行统计调查显示，２０１０年， 中部北陆９县累计接待外国游客２６０万人宿， 其中半数以上为中华圈游客， 来自中国大陆和台湾的游客更是各占四分之一强和五分之一， 比重超过日本全国平均水平。２０１１年，受东日本大地震影响， 访日游客骤减，中部北陆地区同样比前一年减少近一半， 且恢复势头弱于日本其他地区， 这使得以观光业为首的当地各行各业充满了危机感。

今年３月，集官民之力于一体的“升龙道” 项目推进协议会正式成立。 协议会成员囊括了中部北陆９县主要自治体、经济团体、企业界、 旅游业界、流通业界、 新闻机构以及中部运输局等多个日本政府地方派出机构。 截止４月底，已有２７６个团体和企业参与。中部地区工商界领袖“ 中经联”会长三田敏雄亲任“升龙道”项目推进协议会会长。 三田表示，要把“升龙道”打造成中部北陆地区观光业的“代表作” ，当地经济界将全力予以配合。

在中国国家旅游局驻日代表张西龙看来，“升龙道” 所代表的日本中部北陆地区浓缩了日本传统魅力的精华， 既有代表日本最传统文化的景点和景观，如三重县的伊势神宫， 石川县的兼六园，岐阜县的飞弹高山老街，静冈县的富士山；也有高科技产业观光资源， 如位于爱知县的产业技术纪念馆和丰田会馆。此外，“升龙道“ 沿线散布数个世界遗产，包括熊野古道、 白川乡和五个山的合掌村落，比睿山延厉寺。

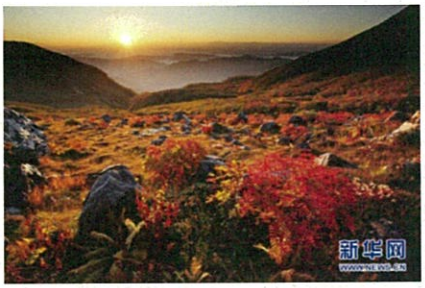
为更好吸引中华圈游客，“升龙道”项目参与各方纷纷出谋划策。 应中部运输局之邀，今年２、３月，来自台湾、香港、 北京的三批观光业界人员前往“升龙道”项目考察， 并提出相应意见。４月下旬，“升龙道”项目徽标和官方海报出炉， 简体和繁体中文的“升龙道”网站也已开通。据悉，５月上旬， 日本中部广域观光推进协议会将向北京、广州派出项目推广团。 即将在上海举行的世界旅游资源博览会上，“升龙道” 项目也将参展。

中部运输局局长甲斐介绍，为给中国游客提供更贴心的服务， 当地准备进一步扩大银联卡使用范围， 在主要饭店接入中文电视节目， 增加观光设施和地铁交通的中文导引。他说，“升龙道” 项目的初步目标是今后三年实现外国游客数量翻番， 从现在的大约２００万人次增至４００万人次。

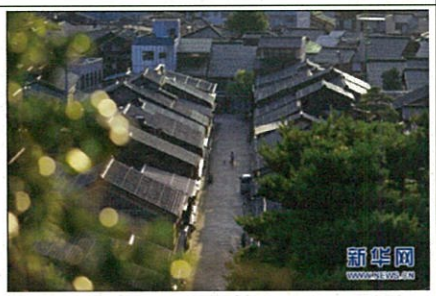
深谙日本各地观光特点的张西龙向记者表示，以往， 中国游客相对集中在东京、大阪代表的关东和关西地区， 但随着中日观光交流日趋频繁， 中国访日游客对深度游的追求也在提高， 日本中部地区丰富的观光资源也将越来越为国人所喜闻乐道。（记者 冯武勇）

富山黑部峡谷

富山立山黑部大雪谷



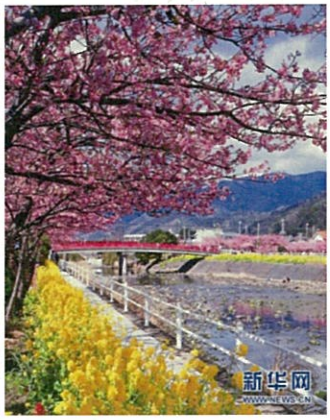
金泽 HIRUBAO 雪溪日出



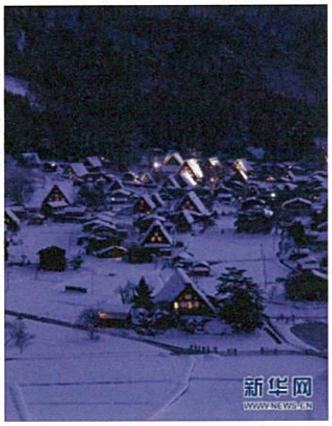
金泽东茶屋街

金泽兼六园

静冈茶和富士山



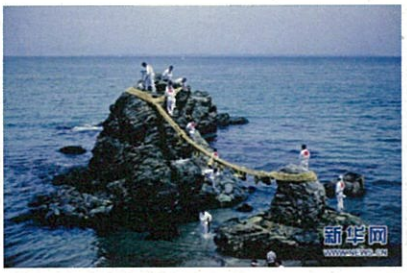
静冈河津樱花节



岐阜白川乡合掌村１(世界遗产)

福井东寻访

岐阜飞弹高山旧街景



三重县夫妇岩

升龙道标识

升龙道海报

熊野古道马越垛

伊贺忍者

滋贺琵琶湖

爱知县德川家康行列

爱知县木曾川鹈饲

长野野猴公园

本ページ独占：日本の『昇龍道』へ更に多くの旅行客を（詳細）

5月に入り、日本国土交通省中部運輸局長・甲斐正彰氏は俄然忙しくなった。中部運輸局と中部北陸9県が連携提唱する大型観光プロジェクト『昇龍道』が、数ヶ月間にわたる綿密な準備・計画を経て、5月にトッププロモーションの時期を迎えたのだ。

『昇龍道』プロジェクトには、中部運輸局の主宰のもと、中部地区の三重、愛知、長野、静岡、岐阜、滋賀の6県と北陸の石川、富山、福井の3県が参加している。この大型広域観光プロジェクトは主に中国大陸、香港、台湾を中心とする中華圏の観光客に向けたものだが、日本では複数の県が連携し中国人観光客を誘い込むこのような試みは初めてとなる。

甲斐氏は「『昇龍道』は、決まった観光ルートではなく、中部北陸地域9県の観光資源をイメージ化したものです。地図上で言うと、能登半島を龍の首に、南端の志摩半島と三重県南部を龍の尾に見立て、南北に並ぶ観光地をつなぎ、龍が大河を渡るような、一気に空へ登ってゆくような様子を現しているのです。」と強調している。

甲斐氏によると、『昇龍道』の構想には、地理上の利点以外に、“絶好のチャンス”と“人の和”も関係しているという。“絶好のチャンス”とは、今年はまさに辰年であり、『登り龍』には吉祥、中華文化圏全体の急成長といった意味である。一方の“人の和”には、中国人観光客が日本を訪れる外国人観光客に占める割合は日に日に増しており、中部北陸地域ではとりわけ顕著であるといった意味合いがある

観光庁がまとめた、宿泊を伴う旅行の統計調査によると、2010年、中部北陸9県に宿泊した海外からの観光客は260万人。そのうち半数以上が中華圏からとなっており、中国大陸からが4分の1強、台湾からの観光客は5分の1を占め、日本の全国平均を超えている。2011年、大地震の影響から訪日観光客は激減し、中部北陸地域でも一昨年と比べるとその数は半分まで落ち込んだ。回復力も日本の他地域と比べ、やや弱いものとなっており、観光業をはじめとする地元の様々な業界に危機感を抱かせている。

今年3月、官民一体となった『昇龍道』プロジェクト推進協議会が正式に発足した。協議会は、中部9県の主要自治体、経済団体、実業界、旅行業界、流通業界、メディア及び中部運輸局などの多くの政府出先機関などで形成されている。4月末日の時点で、276の団体と企業が参加しており、中部地域商工界の牽引役を担っている『中経連』の三田敏雄会長は、『昇龍道』プロジェクトの推進協議会の会長を兼任している。三田氏は「『昇龍道』を中部北陸地域の観光業の目玉にする必要がある。そのために地元経済界は全力を尽くすつもりだ」と述べた。

中国家族旅行局の駐日代表である張西龍氏は「『昇龍道』に代表される中部北陸地域には、日本の最も伝統的な景色と景観である三重県の伊勢神宮、石川県の兼六園、岐阜県飛騨高山の古い街並、静岡県の富士山などがあり、日本の伝統的な魅力が凝縮されている。また、愛知県の産業技術記念館とトヨタ会館などハイテク産業の観光資源もある。その他、『昇龍道』

沿いには、熊野古道、白川郷と五箇山の集落、比叡山延暦寺などといった世界遺産も散在している。」との認識を示した。

中華圏からさらに多くの観光客を呼び込むため、『昇龍道』プロジェクトは、次々と様々な策を打ち出している。中部運輸局の招きに応じ、今年2月から3月にかけ、台湾、香港、北京の観光業者が『昇龍道』プロジェクトの視察に訪れ、ぞれぞれの見解を述べた。4月下旬には、『昇龍道』プロジェクトのロゴマークと公式ポスターが発表され、簡体・繁体両方の中国語のホームページも開設された。5月上旬に中部広域観光推進協議会が北京、広州にプロジェクトの推進団を派遣する予定だという。また『昇龍道』は、上海で開催される世界旅行資源博覧会にも参加を予定している。

中部運輸局の甲斐局長は、「中国人観光客へのよりよいサービス提供として、銀聯カードの使用可能範囲拡大の準備をしています。主なホテルでは中国語放送を導入し、観光施設と地下鉄では中国語の案内版を増やしています。『昇龍道』プロジェクトの最初の目標は、今後3年で外国人観光客を倍増させ、現在の延べ200万人を400万人にすることです」と説明した。

日本各地の観光地に精通している張西龍氏は、「以前、中国人旅行客は東京を中心とする関東と大阪を代表とする関西に集中していましたが、日中間の観光と交流が盛んになるにつれて、その要求もより高いものになってきました。中部地域の豊富な観光資源は、中国人観光客にとって今後ますますそのニーズを満たすものになっていくでしょう」と見解を述べた。

以上